

日本語で考えて、英語で書こう
—心と言葉のグローバル日英作文 入門—

SAMPLE

成瀬由紀雄

目次

はじめに.....	3
日英作文での心得.....	4
1. 直訳をしない.....	4
2. ネイティブ英語を目標としない.....	4
3. 完璧を求めない.....	4
4. たくさんの表現をつくる.....	4
1. 思考の基本単位（単文）	6
文型.....	7
モノ（名詞）認識.....	8
日本語の名詞認識は単層	8
英語の名詞認識は三層——特定/不特定、可算/不可算、単数/複数.....	8
第一認識：特定/不特定.....	8
第二認識：可算/不可算.....	9
第三認識：単数・複数.....	10
英語の名詞認識の三層逆ツリー図	10
英語では三層のフィルターを通さずに世界を認識することはできない	11
コト（動詞）認識.....	12

はじめに

考えてみてほしい。あなたはこれまでの英語学習のなかでどのくらいの英語を書いてきただろうか。ペーパーにして数百枚を超えている人は多くないはずだ。ほとんどの人がわずか数10枚程度ではないだろうか。それも中学校以来の長きにわたる英語学習のなかである。こんなことでは英語が本当の意味で使えるようにはならない。

解決策はただひとつ。書くしかない。書いて、書いて、書きまくる。それしか解決策はあり得ない。

だからといって、ただやみくもに英文を書いていくというのは賢明な方策とはいえない。なにかの技能を習得するには合理的で効率的な訓練が必要であり、特に日英作文のように日本人にとって最も習得が難しい分野では、訓練における合理性と効率性こそが技能習得の鍵を握る。

ところが、これまでの日英作文の訓練はそうした合理性と効率性に欠けていた。和文英訳とは辞書と学校英文法とを使ってただ日本語を英語に置き換えていだけであり、つくられた英語はとてもまともなものにはならなかった。いっぽうで「ネイティブらしい英語をつくる」とのふれこみの日英作文トレーニングでは、日本語の世界観などおかしなことにネイティブの英語をお手本にただ真似をしていだけのものだった。そこには合理性もなければ効率性もなく、ましてや日本人としての矜持などどこにも見当たらない。

この「心と言葉のグローバル日英作文 入門」では、日本人の視点に立ったうえで合理的で効率的な日英作文の理論と手法を皆さんにお届けする。そのために必要な最低限の知識と技法と心構えをここで紹介した。

さあ、あとは実践あるのみだ。がんがん英語を書こう。

成瀬由紀雄

日英作文での心得

最初に、日英作文学習をするうえでの私からのアドバイスをいくつか述べておく。

1. 直訳をしない

日本語には日本語の認識・思考と言語構造があり、英語には英語の認識・思考と言語構造がある。そのあいだには決して乗り越えることのできない壁があることから、日本語を英語にすることは本質的にできない。それを無理にやろうとすると必ず大きな歪みが生じる。私たちがおこなうべきは、日本語で考えたことを英語で表現することである。人間の思考は言語に縛られている部分も確かにある。だが、そのほとんどは大きな歪みなく表現できる。

2. ネイティブ英語を目標としない

英語ネイティブのように英語を書けるようになりたいと思うのは卑屈な考え方である。ネイティブ信仰に目を眩まされた奴隷根性だといってよい。したがって私たちが日英作文を学習するときにはネイティブ英語で書くことを目標としてはいけない。世界の人々とつながりたいのであれば、日本人としての矜持を胸にしてグローバル英語で自分なりの考えを表現していくべきである。ただし、その場合には適正なグローバル英語をマスターしなければならないのは当然である。

3. 完璧を求めない

一般的に日本人は常に完璧を求めようとする。それはもちろん美点であり長所であるが、日英作文ではそれが短所となる。細部にこだわりすぎ、間違いを過剰に怖れるあまりに、自分のつくった英語にどうしても自信がもてない。だが私たちが英語を書く際には少々間違っていてもしっかりかまわない。グローバル英語は英語ノンネイティブの共通語であることから規範が比較的緩めに設定されている。たとえば冠詞や時制での軽い誤用についてはおおよそ許容される（もちろん重い誤用は許されない）。したがってグローバル英語で書かれた英語にネイティブ英語からみて少しばかりのミスがあったとしても、自分が伝えたいことが十分に伝わっているのであればそれでよいのである。

4. たくさんの表現をつくる

ひとつの日本語思考に対しては、じつに様々な英語表現が考えられる。そうした様々な英語表現をつくらうとすることで、私たちの英語表現力は大きく伸びていく。さらにはそれを実際につくりだすことで日本語思

考の新たな側面もみえてくる。日本語思考と英語表現とのあいだに正のフィードバックループが働くのである。こうして私たちは日英作文のトレーニングを通じて私たちの思考そのものを鍛えることができる。

以上、直訳をしない、ネイティブ英語を目標としない、完璧を求めない、たくさんの表現をつくる、という4点は、日本人が日本人として日英作文の学習をおこなっていくうえでの最も重要なポイントであり、かつ、現在の日英作文教育において最も欠けているポイントであると、私は考えている。

☆☆☆

<コラム>

なぜ英作文に日本語が必要なのか

英語教育者のなかには、本当に英語らしい英語を書くには最初から英語で考えて英語で書くべきだと主張する人々がいる。無謀な考え方である。

日本人は日本語で思考をしているのであるから、日本語を使わずに英語だけで思考をすればまともな思考などできない。当然ながら、そうしたつくられた英語文章は私たちの知性を正しく反映しない稚拙なものになる。そんなものをつくるのが私たちの目標ではないはずだ。

日本語文明は長い歴史を通じて構築されてきた世界に冠たる高度文明である。日本語を使えば古代の文化から最先端の科学までのすべてを吸収することができる。日本人はそうした豊かな伝統のもとに知識を積み重ねて思考をしているのである。この素晴らしい資産を使わずに英語で考えて英語を書くということは、京都の街をすべて壊してニューヨークやロンドンのような街並みに建て替えようとするのと同じである。

確かに日本語の世界は独自であり普遍的ではない。だが英語の世界もまた独自であり普遍的ではない。すべての言語世界はそれぞれに独自であり、そしてそれぞれに独自であるからこそ価値がある。私たちが目指すべきは、日本語の独自の世界を確かな足場としつつも、それを越えて、より普遍的な世界へとつながっていくことにある。それが、私たちが英語をグローバル言語として学ぶことの意義である。

1. 思考の基本単位（単文）

センテンス（Sentence）に必要な不可欠な要素は Subject と Predicate、ただそれだけである。

学校英文法で「品詞」（part of speech）と呼ばれるもののうち、Subject は必ず「名詞」である。

Predicate には必ず「動詞」が含まれている。したがって品詞のなかでも名詞と動詞は別格である。

思考の観点からみると Subject-Predicate とは「何が、どうする」「何が、どうである」という「思考の基本単位」を表現するものである。Subject が「何が」にあたり、Predicate が「どうする、どうである」にあたる。この簡単な思考をうまく積み重ねていくことで、私たちは複雑な思考に到達できる

実例でみてみよう。以下に 5 つの Subject-Predicate 文を示す。いずれも簡単な思考を Simple Sentence で表現したものである。

【例 1】

1. 人類の文明は約 200 万年前をその起源とする。

The origins of human civilization lie some two million years in the past.

2. ホモ・ハビリスはアフリカの森で暮らしていた。

Homo habilis lived in African forests.

3. 森は彼らを守っていた。

The forests protected them.

4. 彼らはアフリカの森を離れた。

They left the forests.

5. 彼らはサバンナで狩りをした。

They hunted on the savannas.

ここから簡単な文法解説をしていく。英文法モデルには学校英文法モデルだけではなく数多くの他のモデルがある。そのなかでここでは私がつくった「心と言葉のグローバル英文法」モデルの考えに沿いつつ学校英文法との対比を加えながら解説をしていく。

文型

「心と言葉のグローバル英文法」モデルでは認識の観点から、学校英文法の基本 5 文型を基本 2 文型（SVO, SVC）と派生 3 文型（SV, SVOO, SVOC）とに組み直している。

認識の基本 2 文型（SVO, SVC）とは英語の世界認識の 2 つの基本形を示す文型である。2 つの世界認識とは、①「主体と客体との関係性の認識」と②「主体の属性の認識」である。SVO が①の認識を示し、SVC が②の認識を示す。派生 3 文型のうち SV は SVC の派生形である。SVOO は SVO の派生形である。SVOC は SVO と SVC との複合形である。



以下に実例のなかの文型を解説していく。

1 の The origins of human civilization lie は、The origins of human civilization という主体（S）に lie（水平面に対して平らに接して動かない）という属性（V）があるという書き手の認識を示している。

2 の Homo habilis lived は、Homo habilis という主体に lived という属性があるとの認識を示している。

3 の The forests protected them は、The forests という主体が them(Homo habilis)と客体との対立関係が認識されており、そこに protected（主体が客体を保護する）という関係性があるとの認識を示している。

4 の They left the forests は、They(Homo habilis)という主体（Subject）と the forests という客体との対立関係が認識されており、そこに leave（主体が客体を残したままそこから去る）という関係性があるとの認識を示すものである。

5 の They hunted は、They という主体に hunted という属性があるとの認識を示している。

私たちが英語の構文を選ぶ際には、こうした構文による認識の本質的な違い、すなわち主客の対立関係として示すのか、それとも主体の属性として示すのかをよく識別しなければならない。

一般に英語人は、事象を主体・客体の対立関係として認識することを好む。したがってそれを言語として表出する SVO 文型の利用が多くなる。それに対して日本人は、事象を「場」に「モノゴト」が生じていると

して認識することを好む。この英語人と日本人の世界認識の好みの違いによって、日本人は英語で表現する際に日本語の認識に似ている SVC 文型のかたちを多用しがちである。したがって日本人が英語作文をする際には意識的に SVO 文型を多用するぐらいでちょうどよい。

モノ（名詞）認識

まず知っておかなければならないのは、**日本語と英語では、モノ（名詞）に対する認識方法が本質的に異なる**ということである。

日本語の名詞認識は単層

日本語での名詞認識は単層構造である。日本人はすべてのものを同一カテゴリーで認識している。これは日本人にとっては当たり前のことであるが、しかし世界の言語をみると、このような単層的な名詞認識が必ずしも多数派とはいえない。たとえばインドヨーロッパ語族（欧州圏言語、アラビア語、一部北アフリカ諸語、サンスクリット語など）の名詞は単数・複数・（双数）、男性・女性・（中性）、抽象・具象といった多層的な認識構造をもっている。

英語の名詞認識は三層——特定/不特定、可算/不可算、単数/複数

英語の名詞認識は三層構造をしている。「特定/不特定、可算/不可算、単数/複数」の三層である。

英語では、この三層構造を通すことなく書き手/話し手が名詞を表現することはできない。読み手/聞き手が英語を理解する際にも、必ずこの三層認識を認識しながら理解をしている。したがって日本人が英語を書くとき、たとえそのことを意識していようとなくとも、英語で表現されている「もの」についてはこの3つの認識が必ずそこに表現されているのである。

第一認識：特定/不特定

英語の名詞における第一の認識は「特定/不特定」という区分である。これは、言葉の送り手（話し手/書き手）からみて、その名詞を特定できるものとして認識しているか、特定できないものとして認識しているかという区分である。

特定できると認識した場合には the を使って表現する。この the を敢えて日本語に訳すと「あの例の…」といったところだろうか。いっぽう、名詞を特定できないものと認識した場合には the は用いない。

たとえば、ここに I like reading the book. というセンテンスがあるとしよう。

I like reading the book.

the book とあるからには、この書き手は「あの例の」本のことをすでに知っており、特定できると認識している。

ただしこれだけでは、読み手のほうが「あの例の」本を特定できるかどうかはわからない。もし文脈のなかで「あの例の」本についてすでに述べられているのだとすれば、読み手にもその本のことは特定できるので、このセンテンスに問題はない。しかし、ただ唐突にこのセンテンスが出てきたのだとすると、突然「あの例の本」といわれるわけであるから、読み手としては困ってしまう¹。

以上のことからわかることは、**I like reading the book.**というセンテンスそのものが「正しい」「正しくない」といった議論には意味がないということである。重要なことは、書き手が the に伴う特定/不特定の感覚を正しく認識したうえで、このセンテンスを書いているかどうかにある。

第二認識：可算/不可算

第二の認識は「可算/不可算」という区分である。つまり数えられるか数えられないかである。

たとえば、「私には白髪がある」という内容を英語で表現したいとする。その際に I have white hair. とするのは間違いである。

I have white hair.

×「私には白髪がある」

なぜなら hair という語をなにもつけないで裸のままで用いると頭髮全体を示す表現つまり「髪というものの」の意味になるからである。これでは、あなたは総白髪だということになってしまう。実際、white hair でグーグルの画像検索をしてみると、ほとんどの画像が真っ白な頭髮の人々の画像である。白髪交じりの頭髮の画像はない。

総白髪ではなく少し白髪交じりであるということを言いたいのであれば、hair を可算名詞として用いなければならない。hair を数えられるものとして用いる場合には、何もつけずに丸裸のままで用いるのではなく、a hair, hairs, a few hairs などのかたちにする。実際の英語センテンスとしては I have a few white hairs. などがふさわしいだろう。

I have a few white hairs.

「私には白髪がある。」

¹ 深読みをするならば、この the book は、たとえば聖書の暗喩だという解釈もできないことはない。

第三認識：単数・複数

「特定/不特定」「可算/不可算」という順番に名詞の認識判断を行ったのちに、書き手がその名詞を「可算」と認識している場合には、第三の認識判断として「単数・複数」の区別をする。「不可算」と認識している場合には、単複の区別はしない。というよりも区別ができない。

単数/複数の区別はほとんどの人にとっておなじみのものだろうが、用法から考えてしまうと実際の区別に迷うことが多いものである。しかし用法ではなく認識という観点から考えるのであれば、書き手がひとつだと認識しているときには a をつけて、2 つ以上だと認識しているときには複数形にすればよいだけの話である。あまりナーバスになる必要はない。

たとえば上の白髪の場合は、もし白髪が一本だけなら a hair にして複数あるのなら white hairs または a few white hairs、あるいはもっともっと数多くあるのなら many white hairs にすればよいのである。

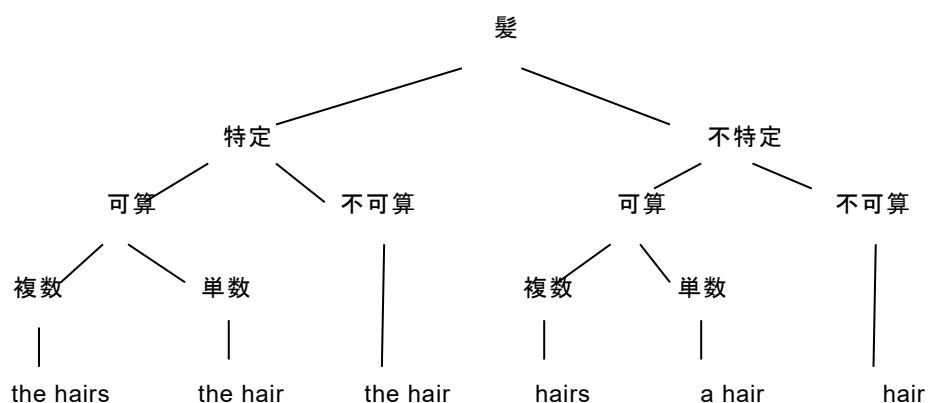
I have white hairs.

I have some white hairs.

I have many white hairs.

英語の名詞認識の三層逆ツリー図

ここまでの話を図にまとめると、以下のような英語の名詞認識の三層逆ツリー図ができる。



単層である日本語の認識構造では「髪」という一語であるが、三層である英語の認識構造を通すと the

hairs, the hair, hairs a hair, hair という 5 つのかたちに分化する²。

英語では三層のフィルターを通さずに世界を認識することはできない

重要なことは、**英語の世界ではこの三層の認識をすることなく世界を認識することはできない**ということである。たとえば英語の世界で「光」について考えるときには、それが既知のものか未知のものか（つまり the がつかつかないか）、可算なのか不可算なのか（具体的な光なのか、それとも抽象的な概念としての光なのか）、もしそれが可算であれば単数なのか複数なのか（ひとつの光源なのか、それとも 2 つ以上の光源なのか）を「必ず」考えなければならない。日本語のように、ただ「光」だと考えることはできないのである。

したがって私たちが英語を書くときにも、名詞を表現する際には必ずこの三層の認識フィルターを通さねばならない。この認識を無意識でおこなえるようになることが私たちの目標である。

以上のことを前置として、以下では、ここで取り上げている 1 から 5 のセンテンスの名詞認識について解説しよう。

1 **The origins of human civilization** lie some two million years in the past.

解説：The origins of human civilization の **the** は後ろの内容を指し示す「後方照応（前受け）の the」と呼ばれものである。**origins** が複数になっていることに注意。**human civilization** は不可算の抽象的な「～というもの」という認識になっていることに注意。

2 **Homo habilis** lived in **African forests**.

解説：**Homo habilis** は固有名詞としての認識。**African forests** は特定の場所ではない（the がついていないこと）複数のアフリカの森を認識している。

3. **The forests** protected by them.

解説：**The forests** は前のセンテンスに出てきた African forests のこと。前に出たことで特定されたのでこの the が使えるようになった。前に出てきた内容を指し示すのであるから「前方照応（後ろ受け）」と呼ぶ。the に認識については、この「後方照応（後ろ受け）の the」が一般的である。（ただし「後方照応（前受け）の the」もある）。英語では、すでに述べられた内容（既知情報）を代名詞と the で指し示す。**them** は前のセンテンスに出てきた Homo habilis を指し示す認識。

4 **They** left **the forests**.

解説：They、the forests とともに 3 と同じ。

2 なお「特定」「可算」「単数」と「特定」「不可算」のかたちが同一になっているのは、英語が「特定」「可算」「単数」に対して the a hair というかたちを許容しないからである。

5 They hunted on the savannas.

解説：They は 3,4 と同じ。the savannas の the は「アフリカの Homo habilis が住んでいた森から出てきて狩りをしているサバンナ」を特定している。

コト（動詞）認識

英語の動詞は多層的な構造を持っている。文法用語でいえば、「モダリティ」「完了・非完了」「進行・非進行」「受動・非受動」「時制（過去・非過去）」「法（叙実・叙想）」の 6 層である。ただし、「法」は独自の言語形式を失ってしまっていて「テンス」がその代替役を担っているため、実際の言語のかたちは 5 層になる。

<英語動詞の 6 層認識、5 層表現>

モダリティ（法助動詞）

完了・非完了

進行・非進行

受動・非受動

時制（過去・非過去）、法（叙実・叙想）

具体例でみると、たとえば、make という動詞では動詞認識のかたちは次の一覧表のようにまとめられる（助動詞の例としては will を用いている）。英語名詞が三層構造で 5 つのかたちに分化したことに比べると、動詞のほうがはるかに複雑な変化である。

英語動詞の 5 層表現

モダリティ(will)

完了／非完了

進行／非進行

受動／非受動

時制・法

